日刊工業新聞　平成18年7月27日(木)

廃プラ処理装置事業

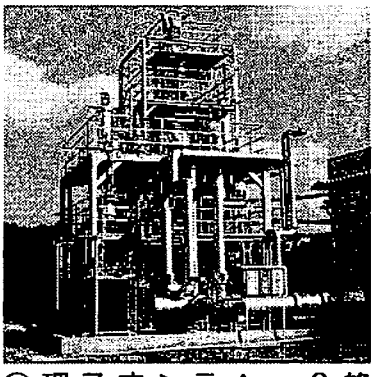
テスコジャパン 本格参入

湿式の油化装置発売

来年内、神奈川に研究所

【川崎】テスコジャパン（川崎市川崎区、小山友和社長、044・201・2862）は、廃プラスチックス処理装置事業に本格参入する。湿式プラスチックス処理油化装置（TPDS）の本格販売に乗り出す一方、再生油（生成油）を利用した新型燃料の開発に向け、07年中に神奈川県秦野市に研究所を設立する。再生油の自家消費による循環システムの構築に加え、新型燃料の利用拡大をてこに廃プラ処理を促進する。

TPDSは溶媒油（鉱物油）を媒体に廃プラを熱風で加熱する方式。設置面積180平方㍍（15×12㍍）とコンパクトで廃プラ670㌔㌘を9時間で処理し、65%を生成油として回収できる。価格は1億2000万円。



▲……テスコジャパンが本格販売する湿式プラスチックス処理油化装置（TPDS）

溶融処理温度を段階的に上昇させることで溶媒油と廃プラの浸透性が向上するほか、常圧のため安全性と安定性を実現できるのが特徴。対応する樹脂はポリエチレン、ポリプロピレン、ポリスチレン、ポリウレタン。

中間処理業者や排出物を限りなくゼロに近づけるゼロエミッションを目指す事業所向けに売り込んでおり、年間2台の販売を目指す。

また、研究所は秦野テクノパーク（秦野市）を候補地として秦野市と交渉中で、敷地面積は990平方㍍。一般に販売できない生成油を新型燃料に応用し、ケミカルリサイクルの用途拡大などに取り組む。総投資額は分析装置や実験プラント、発電装置など含めて3億5000万円を予定。

同社は93年4月に発足。石油プラントなど各種プラント設備のエンジニアリングやコンサルタントを主力に展開。廃プラ処理装置は新規事業の一つで「今後は廃材処理などの分野も手掛け、環境事業を柱に育てる」（小山社長）という。